

定例研究会要旨

日時：平成 21 (2009) 年 7 月 22 日 18:30～20:30

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「ラオ語の方向動詞について—*khùn* (上がる) と *lón* (下がる) を中心に—」

発表者：鈴木 玲子 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授/ラオス語学)

本発表は、*khùn*/(上がる)および*lón*/(下がる)について、2009年3月「東南アジア学」第14号に投稿した拙稿に若干の修正を加え、方向動詞としての*khùn*/および*lón*/の意義素について明らかにすることを目的とした。

「方向動詞」とは、「第一動詞+補語+第二動詞(方向動詞)」という形式において、第一動詞句(以下、「第一動詞」とする)にある方向性を付加して全体で一つの意味をなすような場合の第二動詞のことである。例えば、次例(1)(2)に示す*khùn*/*lón*/のことである。

(1) *khanéen đii khùn*

[点数] [よい]

「点数がよくなる」

(2) *láaw cəy lón*

[彼女] [やせている]

「彼女はやせた」

考察にあたっては、ラオス現代小説の Bounyavong, Outhin(1999)'faapiin' と Bounyavong, Douangdueane(2007)'aathan' から例文を収集し、その出現環境を検討した。

まず、*khùn*/*lón*/を伴う第一動詞を分類し、そのときの*khùn*/*lón*/の用法を検討する。その結果、*khùn*/は「上昇」「増加」「発生」、*lón*/は「下降」「減少」「消滅」という用法があった。第一動詞が移動性や可変性が高ければ高い意味を持つ動詞ほど、*khùn*/*lón*/の本来の意味である「上昇」「下降」の意味を有している。「上昇」「下降」はタテ方向の指向であるので、動詞の意味によってはタテ方向の指向ではなく、ヨコ方向の指向が可能なものには「前進」「後退」という意味を第一動詞に付加することになる。第一動詞に移動性や可変性の意味合いが低くなると、その場での変移、ということになり、それが数量や状態程度の「増加」「減少」を示すことになると考えられる。

さらには最初、何もなかった状態に対しては「増加」ではなく、「なかったものが増えた＝発生」となり、最後、何もなくなった状態には「なくなった＝消滅」というように解釈できる。そしてこれらは全て「増加」と「減少」を使って換言できる。即ち、「上昇・下降」は「高度が増加・高度が減少」, 「前進・後退」は「距離が増加・距離が減少」, 「発生・消滅」は「なかったものが増加・あったものが減少」ということができる。さらには「高度が増加・高度が減少」は「正の指向性が増加・負の指向性が増加」, 「距離が増加・距離が減少」も「正の指向性が増加・負の指向性が増加」, 「なかったものが増加・あったものが減少」も「正の指向性が増加・負の指向性が増加」と全て「増加」を使って換言できる。

即ち、/khùn/ /lón/は、異なる意味をもつものではなく、互いに相補分布をなしており、「増加」という一つの意義素を持つ異形態素同士であると言うことができる。だからこそ、プラス志向の意味を持つ動詞は/khùn/としか共起できず、マイナス志向の意味を持つ動詞は/lón/としか共起できないのである。